



TITLE:

戦争と文化(一)

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 戦争と文化(一). 経済論叢 1919, 8(1): 18-31

ISSUE DATE:

1919-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127480>

RIGHT:

戦争と文化（二）

高田 保馬

戦争の文化に及ぼす影響を茲に論じて見たいと思ふ。從來屢論及せられたる問題ではあるが全世界の大戦亂も終を告げ列國は今其總勘定に忙しい時期に於ては奮けれどもなほ新しい問題たるを失はないであらう。

本論に入るに先ちて、戦争と文化との意義を明にする必要があると思ふ。併し此中戦争の意義に就いては少くとも社會學上には困難なる問題がない。たゞ文化の社會學的意義如何、及び之に附隨して文化發達の意義如何は少しく考察を加ふる必要がある。之に關しては種々なる異論も起り得る事とは信するが、吾人の所信を簡單に言明すると次の如くである。文化とは人間が其努力の結果として作り上げたる事象の總體を云ふ。此文化の特質はそが生れ出でたるものに非ずして作り上げられたる一點に存する。生物又は未だ文化を生ぜざりし吾人の遠祖の有する一切は自然である、自然とは享受者自身の自發的活動を俟つ事無くして存在する事象の總體を云ふに外ならない、蜘蛛の網の巧妙、蟻の社會組織の完備、鳥類の巢の安固は如何にも一見人類の文化と趣を同じくして居る様に見えるけれども、それは等の生物が有機的に決定せられたる盲目的活動によりて形成せられ、従ひて何等彼等の自發的有意的努力の結果に非ずと見らるる限り、自然に屬して文化

には屬しないのである。ただ人類進化の或時期に及び吾人の遠祖は單に與へられたる自然に對して受動的なる適應を遂ぐるに止まらず、自己の意識を發動の根基とする自發的努力によりて種々新なる事象を創造し始めた。而して此努力は不斷に繼續せられ創造せられたる事象は集積して其總體が今日の文化を成すに至つたのである。勿論吾人の活動又は努力にして何等かの刺激に對する反應で無いものはない、從ひて自發的なる努力と云ふも、究局は一の比喩的意義を有するに止るものである（從ひて自發的なる努力も一面より見れば刺激に對する反應として因果の連鎖により生れ出でたるものに外ならず、此努力の結果も亦生れ出でたる一の自然である。たゞ或事象の價値を認むる事によりて此事象の實現の爲に活動する此反應のみを、特に自發的なる努力と云ふ。かくて文化は其價値の爲に實現せられたる事象である、價値を離れて考ふる時單なる自然と化す）而してなほ眼を轉じて見るに、生物は何等の文化を有せずして其個體と種族との生存を持續せしめて居る。蓋し、單純なる生存即ち生物的生存の爲にはたゞ自然を以て足り何等文化ある事を要しない。從ひて吾人の文化は生物的生存即ち嚴密なる必要以上の或物を意味する。換言すればそれは贅澤であり、餘剩である。勿論文化と餘剩との聯絡は論理的に必然なりとは云ひ得ない、詳言すれば、文化は常に必ずしも餘剩なりとは云はれない事もあるであらう。それは人類の或一部のものゝ生存が僅に文化によりてのみ支持せらるゝ事が考へ得らるゝからである。併しながら、社會發達の過去の大勢から云へば、文化は即ち餘剩なりと見るも差支無き事と信ずる。文化は此の如く人間努力の結果として作り上げられたる事象の總體であるが此總體を組立てゝ居る一々の

事象を今文化内容と稱したい。此文化内容は單に個人の意識内に住する心理的のものに限らる可きや、或は然らずしてそれ以外のものを含むや又は後者のみに限らる可きやは問題の存し得る所であらう。此點に關しては從來の學者の意見頗る區々であるが、吾人は今理論の構成上、文化内容の意義を是等のものの或部分に限る必要を認めない。従ひて文化内容は次の二種類のものを含む。一は吾人の心理的内容及び之に伴隨する動作にして人爲をまちて成立し従ひて價值を認めらるゝものであつて、宗教、科學、藝術、哲學等より言語、道德、法律、習慣、風俗等の内容に及ぶ。他は外界の事物にして而も人間の努力を加へられたるが爲に價值を有するに至れるものであつて、所謂經濟的財は殆ど皆之に屬する。なほ此外に第三の種類として社會組織を擧ぐ可きかと思ふ。こは活動し動作する人々の集團として組織としては外界に存在するが如くにも考へらる。しかし、此組織も仔細に分析すれば人々相互間に營まるゝ心理的活動の一定様式より成り立つ様である。従ひて、前掲二種類の何れとも親縁を有する様であるが、結合せる人々の有機體其物が價值を有せざる點に於て經濟的財と異なり、人々の結合せる綜合的狀態としての組織其物が價值の支持者たる點に於て心理的文化内容と異なる様に考へらるゝ。従ひて此社會組織は第三種の文化内容として擧ぐ可きではなからうか。但し、一々の法律、慣習、道德等を離れては、社會組織と云ふものも空虚のものとなり了る事を考へると、文化の考察に於ては、心理的物質的の二種の文化内容を充分に留意すれば、此社會組織を看過しても別に差支は生じないであらう。

文化及び文化内容の意義は上に述べた通りであるが、之に附隨して、然らば文化の發達とは何

ぞやと云ふ事が問題となる。此問題の答解を一言にして盡せとならば、文化内容の増加が即ち文化の發達であると云ひたい。文化の發達と云ふ時は何人も文化内容に改善變革の行はるゝ事と考へ付くであらう、加之全然新しき文化内容の創造も亦文化の發達を意味する事に疑問の餘地はあるまい。かく考へ來れば、文化の發達はこれ、既存の文化内容の變改、未だ存せざりし文化内容の創造添加の二事に外ならぬと考へらるゝ（例へば宗教の發達は舊來の一宗派又は一教義に更に高き一宗派又は一教義の代る事か、さもなければ此舊きものと相並びて全然新しき宗派教義の發生する事と考へらるゝ）。然れども、既存の文化内容の變改は如何にして行はるゝかと云ふに新しき文化内容の創造せられその爲に既存のものが存在する必要を失ふが故である、従ひて此變改も結局は文化内容の増加の一場合に過ぎない。而してそれが増加しても既存の内容を逐斥せざる時には之と相ならびて共存し、云はゞ全然新しき文化内容の添加の場合を實現する。かく見來れば、文化の發達と云ふ事は詮する所文化内容の増加に外ならぬのである。併しながら文化の發達にはなほ他の一面の存在する事を忘れてはならぬ。文化内容の増加と云ふのは、云はゞその性質的方面である。然らばその分量的方面は何物を意味するか。その答は極めて簡單である。一々の文化内容を支持する人數の増加即ちこれ文化發達の方量的方面である。詳言すれば文化内容は何等其數に於て増加する事なくとも、既存の内容が其支持者の數を増す事がある、此時は文化の發達が性質的方面に認められないが數量的方面に於て存する。既存の文化内容が其支持者の數に於て何等増加を見ずとも、新内容によりて取り代らるゝ事がある、此時文化發達は性質的方面に存して

分量的方面に存しない。たゞ一般の場合としては二方面に於ける發達が相ならび存するのを見るのである。

二

戦争、文化、文化發達の意義にして略ぼ明なる事を得ば、吾人は茲に當面の問題に進む事ができるのである。而して戦争の戦化に及ぼす影響如何と云ふ此問題は畢竟戦争が文化の發達即ち文化内容の増加を助長するか、又は然らずして阻碍するかと云ふ事に歸着する。併しながら此の如くに見ても此問題は決して簡單なるものではない、簡單でない云ふのは戦争の行はるる場合により文化内容の増加に及ぼす影響も極めて雑多であり、従ひて概括的な解答を與へ難いからである先づ文化の極めて低級なる状態に於ける戦争と文化の充分に發達したる今日の文明國間に於ける戦争とは其文化發達の上に及ぼす作用に著しき相違があり、多くの學者は此作用の方向が全然相反對して居るとまでに考へて居る。勿論文化發達のあらゆる時期に就いて當面の問題を考察可きであるが、吾人は敘述を冗長ならしめざらんが爲に、考察をたゞ文明國間に於ける戦争にのみ眼局したいと思ふ。次にまた、單に文明國間に於ける戦争のみに就いて見ても、戦争の結末に生じ来る相互の關係は極めて雑多である。統計學者の所謂結果の複數の事實が明白に現はるゝ事此の如きは社會學的事象に於て甚だ稀である。同じ戦争の結末でありながら、或時は双方の反感が戦前以上に高まる事もあらう、或場合には一國が他國に屈服して從屬的地位に立つ事となり、其間に或程度の新しき統一を見る事もある。又は然らざるまでも、雨降りて地固まり、双方の敵對

の念は戰爭的活動に放散し去りて新に平和的交通の程度を加へるに至る事もあろう。戰爭に附隨し來る事情の如何に應じて此結末の状態は雜多である可き筈である。或は次の如く考へるものがあるかも知れない、戰爭は元來激烈なる敵對的活動である、故に其結末とても原則としては此敵對關係の殘存と見る可きではないか、其他の結末狀態は附隨的事情の作用によりて生ずる副次的のものに過ぎまいと。併し吾人は此の如く一概に考へ去るを欲しない。勿論敵對關係が戰後に存續する事の多いのは事實である。然しながら、之は戰爭が敵對的活動である事より來る必然の結果ではない。戰爭其物は激烈なる反對の一形態であるが、此反對の結果として生じ來る社會的關係は必ずしも反對に限らない。例へば結合の緊密は其結果として結合をのみ生ずるかと云ふに必ずしもさうでないのと趣を同じくする。既存の親密なる結合は往々反對をして最も激烈ならしめる事がある、親戚間に生じたる不和の如きは其一例である。之と同じく戰爭は強き反對であり乍ら往々其結末に於て結合を生む事があり得る。一方に於て戰爭により相互の接觸が増し其間に多少新なる理解を生ずる事もあろう、又他方の屈服によりて哀憐の情を生じ或は他方の優越に對し尊敬の念を生ずる事もあろう。特に注意す可きは、個人間に於ても暴行が憤怒の念を散せしめるが如く、戰爭は國家的憤怒相互的敵對の念の發散の絶好なる機會である。此發散の途を見出す事によりて相互の反對の減少し得可き事、新なる結合の準備せられ得可き事は自然の勢である。此の如く考へ來れば、戰爭其物の結末が常に必ず反對の殘存である可き道理はない様に思ふ。種種錯綜せる事情によりて雜多なる結末を見ると云ふのが理論上正當なる見方ではあるまいか。果

して然りとすれば、戦争が其結末に齎す新しき社會的關係を通して、間接に文化の發達に如何なる影響を及ぼすかは決して一概に論じ去る事を得ない複雑なる問題である。茲に於て吾人は問題を簡單ならしめんが爲に此戦争の結末に生ずる社會的關係の結果として來る文化の變動を顧慮の外に置きたいと思ふ、換言すれば戦争の終了後に來る其結社の結果の文化發達に及ぼす作用を看過したい。従ひて吾人の問題は戦争其物並びに戦争の準備狀態がそれ自體文化發達の上に如何なる影響を及ぼすかと云ふ事となるのである、云はゞ戦争の文化に及ぼす直接的影響如何の問題である。

三

戦争の文化に及ぼす影響如何。此複雑なる問題を簡單化して吾人は之を次の如きものとなした。即ち近代文明國の戦争が其準備狀態并に戦争自體の直接なる作用として文化内容の増加に如何なる影響を及ぼすかと云ふ問題はである。然れども、吾人は此の如く限局せられたる問題に對しても、明に異なる二の觀點から之を考察しなければ此影響の總體を認め難いと思ふ。一は心理社會學的とも云ふ可き見方である。戦争は交戦團體間に行はるゝ一種の心的相互作用として他の社會現象と同じく其本質上畢竟心理的のものである、文化の發達も勿論心理的なる事象である。心理的なる戦争は等しく心理的なる文化の發達の上に、何等心理的ならざる因子の仲介を要する事無くして、直接に影響を及ぼす事否み難い。此全然心理的なる平面に於て戦争が直接に文化の上に及ぼす影響の考察が問題の答解の爲に必要な事は云ふ迄も無き事である。而して此考察は

對象の性質上心理的因子の作用を中心として考へなければならぬ、これ吾人が之を名けて心理社會學の見方と云ふ所以である。他の一の見方は今假に名けて生物社會學の見方と云ひたい。文化の發達は心理的なる事象ではあるが、生物學の因子によりて制約せらるゝ事は明白である。戰爭は人口の質及び量と云ふ生物の因子の上に作用し之を通じてまた文化の發達に影響を及ぼし得るものであるが、こは云はゞ戰爭が心理的なる平面内に於て文化の上に作用を傳へるのではなく、他の生物的平面の上に作用し其結果としてまた心理的平面上の文化に影響が及び來ると認む可きであらう。仲介者が生物的事象である爲に此種の影響の考察には常に戰爭に基く生物的因子に於ける變動如何を先づ明にし、次にそが文化の上に及ぼす影響如何を見ると云ふ順序をとらなければならぬ。従ひて其際生物學的智識の參照は不可缺の事である、此見方を生物社會學の見方と云ふ所以は此點に存する。

戰爭が文化の上に影響を及ぼす方向又は道行には前掲の二つのものがある以上、二種の見方は其何れをも廢する譯にゆかぬ。吾人は先づ所謂心理社會學の見方から此問題を考察し、次に生物社會學の見方に轉じたい。此順序には全然何等の意義もない事を一言斷らねばならぬ。

四

心理社會學の見方からは先づ次の諸點に眼を注ぎたいと思ふ。第一には戰爭及び其準備狀態が人力財力、其他の社會の勢力を所謂軍事的なる特殊の活動に置く、此事實が文化の發達の上に如何なる影響を有するか、第二には戰爭及び其準備狀態は軍事的活動に直接參加する事無き一般社

會の組織社會的關係の上に變動を及ぼし、此變動がまた文化の發達に作用する、此作用の内容如何。吾人は先づ第一の點に考察を加へたい。

戦争が種々なる勢力を軍事的活動の狀態に置く事より生ずる影響はまた之を二に分ち考へ得られる。其一は戦争と云ふ破壊的活動が文化の發達に及ぼす影響であつて。其二は種々なる勢力が文化的活動の範圍から軍事的活動の中に吸収せらるゝ事より生ずる文化的結果である。云はゞ前者は戦争が此道行によりて文化に及ぼす影響の積極的なもので、後者は其消極的なものと見る可きであらう。

戦争が破壊的活動として文化の上に及ぼす影響は明白である、戦争による人命破壊は茲に論じない、今眼を注がんとするは物質の上に及ぼす破壊作用である。此破壊作用は一方に於て物質的文化内容即ち經濟的財の消失を意味し他方に於て心的文化内容の減耗を意味する。戦争によりて生ずる銃砲、彈藥、馬匹、城塞、艦艇其他の攻防要具の消失に就いては説く迄も無い。軍事以外の用に供せらるゝ富の破壊特に資本財の破壊は常に必ず戦争に伴ひ來る事象である。砲彈によりて破壊せられ、兵火によりて焼かれ其他遺棄撃沈せらるゝ事物の種類は數へ盡す可くもない。特に此破壊が従前の如く單に兵火相見える戰場に限られずして、航空機潜水艇の發達と共に海陸のあらゆる地點に擴大し來れる事は注目し値する。而して此富の破壊は其實單に富の破壊たるに止まらずして同時にまた心的文化内容の破壊たる事が多い。國民の宗教的信念、藝術的趣味、道德的信條科學的智識と云ふ如き文化内容はそれ自體心理的のものであるけれども、常に所謂外物に

物體化又は客觀化せられ居るものである。此等の外物は此等の内容を個人の意識に吹き込む機縁をなすものであつて所謂精神的文化の存続は此吹き込む作用の不斷なるが故なりとも考へらる。此意味に於て一國民の文化の著しき部分は其殿堂に存し寺院に存し、美術館博物館圖書館に存すと云ひ得られよう。然らば無數の壯麗なる建物の破壊、優秀なる藝術品の破壊は或程度まで宗教藝術道德等の文化内容其物の損耗を意味すと見なければなるまい。此等の破壊による犠牲は交戦國何れも之を負擔するを常とするが、最も多く何れの國民の上に落つるやと云はゞ戰敗者である。中立國が其負擔者となる事もあるがそれは例外であらう。何れにせよ、此損耗は破壊の慘禍を蒙るもの、文化の高き程著しい。勝者敗者の何れの文化が發達の高き段階にあるものかは重要な問題であるが其考察を生物社會學的考察の場合に譲る。

戰爭の此破壊的活動による影響は極めて明白である割合に、他の道行による影響に比して左程重大でない。軍事的活動が國民の種々なる勢力を吸収する事より生ずる所謂消極的影響は特に注意に値する。此影響は一方に於て常備軍又は武裝的平和の結果として他方に於ては戰時諸般の動員の結果として考察せらるゝ事を要すると思ふ。

平常巨大なる軍隊及び海軍力を支持する事は云ふ迄も無く一國に取りて著しき財政上の負擔を意味する。此等の軍事費が歳出の如何に大なる部分を占めたるか、國富及び國民所得と如何なる割合を保ちたるかは此戰前に於て屢議論せられたる所で、人々は皆武裝的平和の費用の如何に大なるかを充分に知悉して居たのである。而して此等の費用の大部分は艦艇、銃砲、彈藥、馬匹、

糧秣、兵營、陣營具等國民の福祉とは直接に何等の關係無き事物に費さるゝ事を思はなければならぬ。若し此等の生産に費されたる一國の生産力が其他の事物の生産に向けらるゝならば國民の經濟的幸福はそれだけの増進を見たる筈である。更に留意す可きは壯丁を徵募して兵營生活を營ましむる事の影響である。此等の勞働力の引上げによりて生産能力にそれ丈の損耗を來す可き事は姑く説かないとしても、なほ文化の上に數多の影響が及び來ると考へ得られる。就學中又は學校を終へても社會の實務の練習僅に緒に就ける時に於て一年乃至三年の兵營生活を營み、修業の時期を中斷せらるゝのみならず、其間文化内容の追求とは全く異なれる活動に没頭しなければならぬ。國民の學問的、藝術的、宗教的能力の發展は幾分なりとも阻碍せらるゝ事に疑を挾む餘地はあるまい。また多數の壯丁に於ては勞働上に必要なる技術的練習其他職業に必要な習得の妨けらるゝのも明白である。此等の影響はよし計數を以て精確に表示し難きにもせよ、其存在する事は爭ふ餘地の無い事だと思ふ。兵營生活が體格を強健ならしめ、規律、克己、服従の美德を養ふと云ふもそれが文化の發達上果して良好の結果を奏し得るや否やは疑問である。況んや體格の改善は必ずしも軍隊に俟つものにあるまじく、また兵營生活が淫靡の風に感染せしめる事の頻繁なるも爭ひ難いのである。兵營生活によりて都市集中の勢の助長せらるゝ事、兵營生活が需要の集中統一を來す事によりて一國の生産力に多少都合よき影響を與へ得る事もあらうが、それは別に重要な意義を有する程の事でもない。

注意す可きは戰時に於ける動員である。これが文化の上に及ばず影響は武裝的平和の作用の大

仕掛にして程度の激烈なるものと見て差支はない。活動力の中心を成せる年齢のもの、大半を戦場に奪ふ事はそれ自體が既に精神的文化に對する打撃である。科學も、藝術も、宗教も、教育も其多數の従事者殊に活氣と獨創力とに富むで居る人々の多數を戦場に送る事によりて、其發達は當然に阻止せられざるを得ない、況んや後に説く所の道行により戦争が創造的活動の自由を束縛する事著しきに於てをやである。元來戦争が小仕掛なる間は此種の影響は微弱であると云ひ得らるゝであらう、それは此等の文化的活動に於ける優秀と生理的強健の程度との間に多少逆行の關係があるからである。併し戦争の規模大なる事此度の戦争の如くなるに及べば此道行を通じて精神的文化の蒙る悲觀的影響は極めて明白である。殊に戦争が精神的文化の優秀なる代表者支持者に對して其活動を中斷せしむるのみならず、其生命を奪ふに至りては永久に償はれざる損失である。戦争が國內に残留するものゝ死亡率を高める事も同様なる影響を有するのであるが、それは後に説く事にする。戦争による極めて廣義の動員が物質的文化に及ぼす影響は更に明白である。勞働力の大半は召集の名の下に、巨額の資本は租税、公債、寄附の形に於て經濟界から引き上げられ國內一般の需要は減退する、或は危險と破壊との爲に或は汽船鐵道等の軍用徵發の爲に交通機關は著しく其作用を停止する、此等の事實は當然に生産力の阻碍とならざるを得ない。殊に残存したる生産力とても其著しき部分は軍需品の方向に向けらるゝに於ては、國民一般の物質的幸福は益損失を蒙る譯である。勿論交戦國に於ける多數の戦争成金の發生は此議論を否定する如くに見えて然らず、これは戦争に於ける通貨の空前の膨脹利得の不公平なる集中から生じたる現象で

國民の富の増殖を意味するものではない。而して吾人は此物質的文化の損害が間接に精神的文化の上に影響を及ぼしつゝある事を忘れてはならぬと思ふ。

二種の文化は結社生活の二見であるが、物質的文化は云はゞ長兄で精神的文化は幼兒である、前者の助力なくして後者は充分の發達を遂げ得ない。又譬へば、二者は社會と云ふ同一地盤より生じ出づる作物と縁肥とのやうである。作物即精神的文化が美しく花さき實するには、縁肥たる物質的文化が之に伴ひて充分に榮える事を要する。勿論物質的生産の發達は自然科学の發達に負ふであらう、しかし、自然科学の發達は前者の發達助力なくして行はれ得ない。富の集積に伴ひ來る發明新案の刺激、研究の材料と設備との豊富なる用意、國民の助力と注意との富に向ふ集中、此等のものなくば自然科学の進歩も存在しなかつたであらう。かくて經濟的發達は自然科学の發達を産めるのみならず、其他の精神的文化の發達に對しても一方直接に其發達の條件をなすことにより、他方自然科学の力を通して、決定的なる影響を與へたのである。此意味に於て精神的文化も物質的文化の發達に伴ひてのみ長く發達する可能を藏し、然らざる時は停滯を免れない。これは粗雑な一般論であるが、此關係は常に戦争の場合にも認められる。中にも戦争に投せらるゝ費用の爲に研究の設備特に國家的設備の充分なり得ざる事、交通の阻碍生産の減少の爲に研究の材料の豊富なり得ざる事は著しく交戦國の自然科学的發達を妨けて居ると思ふ。藝術ことに造形藝術が同様にして蒙れる打撃も少くはあるまい。勿論吾人は戦争が他方に於て文化の上に多少の助長的作用を營むで居る事を忘れるものではない。戦争の刺激と必要とによりて科學、藝術、宗教

等の方面に新なる展開の試みられたる事は充分に之を認める。例へば種々なる武器の發達は戦争を離れて何の意味をも有しないが、其發達が同時にまた有用なる事物の發達であることもある。今日の航空機、潜水艇、無線電信等の發明完成が戦争の爲に助長せられたる事も著しいであらう。火藥毒瓦斯等に關する必死の研究が理化學的方面に新發見を齎さないとも限るまい。また戦争に伴ひて之を主題とする戦争文學、繪畫、演劇の現はるゝ事、戦争によりて宗教的信念の特に高まり來る事なども、否定せらるゝ事を得まい。併し大體に於てこれらは、平素一般文化的活動に向けられたる勢力の僅に一部分が戦争に關係ある文化方面に向けられたるより生じたる事實に過ぎない。かゝる彼勢力の大部分を驅りて戰場に浪費する事より生ずる損失を償ひ得可き理由は存在しないのである。